

研究結果報告書

所属： 日越大学日本学プログラム

役職： プログラムディレクター

氏名： Pham Thi Thu Giang

研究結果

今回「日本の近代化と仏教者の本分認識についての思想的研究」というテーマで研究・調査を行った。

明治5年に太政官布告133号（「自今、僧侶肉食妻帯蓄髪等可為勝手事」）が発行され、仏教界に大きな論争を起こした。それに従うのか、従うことによって破戒になり、僧侶という存在意義がなくなるではないかという批判の声が仏教界内部から出た。その議論から新時代に僧侶の本分がどのように認識されたのか、太政官布告133号を反対する側（浄土宗の行誠、真言宗の釈雲照など）と支持する側（浄土真宗の僧侶等）が残した文献・記録をより広く調査し、収集し、分析を行った。当初太政官布告133号は仏教界を破滅させるものであると多くの僧侶が認識し、政府に反対し、公認仏教運動などを挙げた。しかし、その後、新仏教運動が生まれ、仏教界が政府に依存するものではなく、独立しなければならないという主張も提唱されるようになった。そこから各宗派が宗規を作成し、教団の組織を改革し、新しい時代に合った教理まで探求する運動が挙げられるようになった。そのから「活仏教」という概念が生まれ、仏教界が本当の意味で近代化されるようになったことが窺える。

さらにこれまで日本の僧侶の肉食妻帯問題を考察して、日本仏教は行動的仏教（社会参加仏教）であると示したが、今回は興味深いことにベトナム南部の仏教系宗教、特にDAO TU AN HIEU NGHIA（四恩孝義道）と比較し、行動的宗教であることが共通していることを分析した。

このように従来の研究では、日本の仏教は近代に入り、廃仏毀釈で様々な打撃を受け、衰退の一途を辿ったという見解が一般的である。しかし実際に新しい思想が導入され、新仏教運動のような革新運動が行われ、仏教界全体も近代化されたことを明らかにした。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

- ・「近代日本仏教における戒律問題と僧侶の存在意義に関わる議論」（『社会科学情報』に2025年6月掲載予定）
- ・「開墾者たちが創り上げた仏教系新宗教とその社会参加活動 - ベトナムと日本との比較 -」（『古代学・聖地学』14号、奈良女子大学大和紀伊半島学研究所 古代学・聖地学研究センター発行、2025年2月、P27～36）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）